



目指すのは、 品質世界一の 金型メーカー

株式会社ツバメックス 代表取締役社長

賀井 治久

がい はるひさ

終戦の日の静寂

東京・両国生まれである。生家の向かいには照國道場。双葉山にも勝ち越した横綱が所属する伊勢ヶ濱部屋を、近所の人々はそう呼び慣わしていた。

株式会社ツバメックス代表取締役社長、今年80歳になる賀井治久は、“大鉄拳”を頂く旧両国国技館のお膝元で、石蹴りやベーゴマをして遊ぶ少年時代を過

ごす。父は丸の内の空調関係の会社に勤務していた。

太平洋戦争が始まり、やがて本土にも空襲が及ぶようになると、賀井一家は親戚を頼って千葉の四街道に疎開した。

約10キロ離れた千葉市が焼夷弾攻撃を受け赤く燃えるのを、賀井は夜空の下で眺めていた。「あの焼夷弾というのはね、油脂が流れ込んで田んぼもダメにしちゃうんだよね」と賀井は当時を振り返る。

賀井が小学校5年生の8月の暑い日、一族揃ってラジオの前でいた。大事な放送があるということだったが、聞こえてきた玉音の意味を解することはできなかった。「負けたんだ……」という大人のつぶやく声で、賀井は外に出た。真夏の陽光だけがかんかん照りつけているだけで、周囲はまったく音がなかった。

「これからどうなるのだろうか？」虚脱感の中で、賀井は静寂に耳を澄ませていた。

次ページへつづく



ツバメックスオリジナルのiPadアプリですべての図面を管理している

敷地内のグリーンでゴルフの練習をするのが息抜き

自動車ボディ新工場を建設

家計の事情で夜間高校に進学

賀井は新制中学の1期生となった。旧制と違って義務教育となり、試験を受けずに入学できるのは得をした気分だった。その一方で、この空腹感ときたらどうだ？ 育ち盛りだというのに年がら年中腹を空かせていた。農家の同級生は銀しゃりを食べているのに、自分たち疎開組は蒸かしたサツマイモを切って弁当箱に詰めていた。

授業のない時には、リュックを背負って母と農家を訪ね歩き、着物を米に替えてくる。食べることが先決の毎日だった。

一家は両国に戻り、元のような暮らしもじよじよに歩み始めていた。賀井が中学卒業を控えた頃、父がリウマチで倒れ、療養生活を余儀なくされた。多くの東京大学合格者を輩出する地元名門の両国高校を志望する賀井だったが、家計を助けなければならなくなった。工務店に勤め、夜間、墨田工業高校の定時制課程で学ぶことになった。

昼間の仕事は役所からの請負で護岸工事などを行うものだった。木場で仕入れた材木を自転車に括りつけて運んできたりする。

やがて父の病も癒え、両国にある会社付属倉庫の管理業務に復職すると、賀井もそれを手伝うようになった。

一時的に不如意になっていた家計がなんとか持ち直すと、賀井の中に大学進学への思いが甦ってきた。

両国高校に進学した弟が東大を目指して受験勉強に励んでいるのも自分を焚きつけた。その弟に数学の問題集を見せてもらおうと、さっぱり分からない。夜間の工業高校からの受験は、やはり困難なのかもしれない。だが、逆にそれが賀井を決意させた。

「独学では無理だから、予備校に行かせてほしい」懇願する賀井に、父もすまないと感じたのだろう、希望をかなえてくれた。

夕張炭鉱の日々

2年浪人した賀井は、1年浪人した弟と隣り合った席で、東大入試に臨んだ。「試験中にね“ちょっと答案を見せろ”と言ったら、弟のやつ“ダメ!”って隠すんだよ。あれはないよな(笑)」

結局、兄弟そろって合格。賀井は駒場で2年間の教養課程を経て、工学部鉱山科に進んだ。鉱山科を選んだのは、疎開した千葉の小学校時代、代用教員が「黒いダイヤ」と呼ばれる石炭の重要性を熱弁していたのが耳に残っていたからだ。

卒業後は北海道炭礦汽船株式会社に入社。夕張炭業所に勤務した。確かに給与はよかった。当時、新卒の月給が1万円のところが4万円ももらった。夕張炭鉱には1区～4区までの鉱区がある。賀井は1区を任された。炭鉱の仕事は大きく2つに分けられる。石炭の採掘を行う「採炭」と、坑道の掘削と安全を保つ「保安」である。賀井が担当したのは「保安」だった。

現場まではトロッコ、マンコンベアを乗り継いで1時間ほどかかる。到着すると2時間かけて坑道を1周し、保安確認を行う。天井から土がこぼれ落盤の予兆を見せていないか、壁から水が漏れていないか……なにか不安要素があれば、作業員に対処を命ずる。

後刻、再度坑道を回って点検を行うと、「これが直っていないんだよね。なにしているかっていうと、作業員が寝てるの。だけどね、あんまりキツイこと言うとな“労働強化だ!”と言ってオルグが飛んで来るからさ」オルグ(オルガナイザー)とは労働組合と現場との連絡員である。厳しく危険な労働条件ゆえだが、当時、炭労と呼ばれた炭鉱労働組合の力は強かった。「でね、そのオルグとも飲んでさ、折り合い付けないといけないわけ」

賀井自身も危険な目に合っている。1度目は、掘削工事中に落石事故に遭遇した。1トン以上の石が目の前に落ちてきて、作業員が下敷きになった。「落石事故っていうとね、蛙がぺしゃんこになるような姿を想像するでしょ？ しかしね、実際は肺に圧がかかって呼吸困難になるの」

2度目は、坑道を歩いていたら正面からトロッコが来た。狭い坑道で逃げ場がない。ふと見ると壁にへこみがあって間一髪そこに身を寄せた。腰に掛けていたカンテラのバッテリーがガリッと音立ててトロッコに持って行かれた。

3度目は、先進ボウリングのため、坑道の二酸化炭素濃度を測定器で調べてい

た時だ。急に足が利かなくなった。上り坂になっていて、軽い二酸化炭素がそこに溜まっていたようだ。遠のく意識の中で、賀井はわざと坂に身体を投げ出し、低地へと転がり落ちた。ダクトから吹き出すエアに顔を近づけながら、「これで3度目だ」と思っていた。命にかかわる事故が、炭鉱に勤めた3年間で3度あった。それなら、10年勤めているうちに10度あるのか？ それをすべてやり過ぎせるのか？

金型の未来

賀井に転職を決意させたのはそれだけではない。ある日、日経新聞が石炭業界の年商と八幡製鉄所の年商が上であることを伝える記事を見つけた。ひとつの業界と一企業の年商が一緒とは……賀井は先行きの不透明感を強くした。

「あなた、それならいい会社があるわよ」と提言したのは妻の良子だった。

1963年、夕張炭鉱をあとにした賀井は、良子の郷里、新潟県燕市へ。金属材料を扱う藤田金属株式会社に入社する。そのまま鉄板の成形法を学ぶために埼玉県和光市の理化学研究所へ派遣された。「田舎

の会社だし、期待されてたみたい」と賀井は笑う。

1年後、藤田金属の子会社である燕プレス工業株式会社(現・ツバメックス)の経営が思わしくないとのことで呼び戻され、同社へ入社した。

燕プレス工業は、いわば金属材料業者である藤田金属の材料を先陣を切って大量消費するため金型を製造し、量産する会社だった。しかし、そこで行われている金型製造は、仕上げ職人の経験と勘に頼る旧態依然としたものだったのである。

賀井は金型製造自体の近代化に取り組んだ。それはなにか？ すべてを学術的、論理的に考えることだった。計算式を考えて図面を書き、試作品をつくり、うまくゆけば数値化して取り入れる。そうやって月間に100型つくった。

金型の評価が上がると、売り型の注文が入って来るようになった。すると、職人がすべてを握る、旋盤、やすりの作業では工数がかかり、対応できない。

必要があるのは大きな自動車型である。木型を使った鋳物工法も必要で地元業者と協力体制を持ったが納期とコストがかかった。そこで業界に先駆け、NC工作機

械の導入を決意すると、社内外から反対する声が上がった。「一緒になって勉強しよう」と賀井が陣頭指揮を執り、ソフトの自社開発に成功した。すると、2週間かかっていた作業を4時間でできるようになった。

82年には日本で初めて3次元システムの開発に乗り出す。東京のCAD/CAMメーカーを訪ね、深夜零時～朝6時までの試用許可をもらい、手応えを得ると本格導入を決めた。ただし、それまで一手に引き受けていた工程管理、営業、設計、材料手配、クレーム対策、すべてに社内責任者を立て、賀井はCADの勉強に向かった。

89年、亡くなった先代社長のあとを受けて社長就任。自動車メーカーが進化すると必要な機械が増える。それとともに人が増え、工場の建屋も広くなっていった。

チャレンジ精神は衰えることなく、このたび13億円を投資し、自動車ボディの金型と量産を行う新工場を建設。「質的に世界一の金型メーカーを目指します」と賀井はあくまで穏やかな口調で語る。

(取材・文=上野 歩)

Company Profile

エミダス会員番号：33450

- ◆会社名 株式会社ツバメックス
- ◆所在地 〒950-1324
新潟県新潟市西蒲区高野宮 3283-1
- ◆TEL/FAX TEL：025-375-4945
FAX：025-375-5898
- ◆設立 昭和36年4月1日
- ◆従業員数 196名(平成25年3月現在)

- ◆主要三品目
 - ・プレス金型、プラスチック金型設計・製作
 - ・プレス加工及びアッセンブリ
 - ・プラスチック成形
- ◆お問合せ 担当：金澤 忠幸